

県北保健所管内のインフルエンザ患者の報告数が、第5週(1月29日～2月4日)にピークになり、先週の第7週では**警報レベルが続いています**。
 これまでのインフルエンザ迅速診断検査ではA型よりB型の患者数が**2.2倍多く**なっていますが、A型とB型で症状の出方や重症度にほとんど違いはないとされています。
 また、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎やRSウイルス感染症が流行しています。
外から帰ったら、しっかり手洗い、うがいなどの感染予防対策を続けましょう。
人混みの中での飛沫感染予防にはマスクも有効です。

🌞今月のトピックス

百日咳(五類感染症)が全数把握になりました

従来感染症法では、「百日咳」として、定点把握疾患に分類され小児科定点から報告されていましたが、近年の患者増加の特徴として小学校高学年以上の患者が多くなってきたことから平成30年1月1日から、それまでの小児科定点把握疾患から成人を含む全数把握疾患となりました。当保健所では1月～2月28日現在で、9件(5歳～13歳)の届出がありました。

(1) 臨床的特徴

潜伏期は通常5～10日であり、かぜ様症状で始まりますが、次第に咳が著しくなり、百日咳特有の咳が出始めます。典型的な症状は、顔を真っ赤にしてコンコンと激しく発作性に咳込み(スタカート)、最後にヒューと音を立てて息を吸う発作(ウープ)となります。しかしワクチン既接種の小児や成人では典型的な症状がみられず、持続する咳が所見としてみられることもあります。

(2) 治療

百日咳に対する治療として、マクロライド系抗菌薬が用いられ、咳発作に対しては鎮咳去痰剤や気管支拡張剤等が使われることがあります。早期に適切な抗菌薬による治療が開始できれば、百日咳の重症化を防げ、患者の周囲の人たちへの感染力を弱める効果が期待できます。
 また百日咳は周囲の人に感染しやすいため、百日咳にかかったら、咳エチケットを励行し、職場や学校を休んで通院以外の外出を控えましょう。

(3) 予防

百日咳には予防接種(ワクチン)があります。定期接種ですので、かかりつけの小児科医師に相談しましょう。百日咳は生後12ヶ月までの乳児期に感染すると重症になりやすいので、生後3ヶ月になったら早めに接種を受けましょう。

百日咳の届出基準

- 医師は、上記の臨床的特徴を有する者を診察した結果、症状や所見から百日咳が疑われ、かつ届出のために必要な検査所見により百日咳患者と診断した場合には、感染症法による届出を、7日以内に行わなければならない。
- ※ 届出のために必要な検査所見

検査方法	検査材料
分離・同定による病原体の検出	鼻腔、咽頭などから採取された検体
PCR法による病原体の遺伝子の検出	
抗体の検出(ペア血清による抗体陽転又は抗体価の有意な上昇、又は単一血清で抗体価の高値)	血清

※PCR法はLAMP法などを含む